へ13
3087
27

特
へ13
3087
27

壹

予傷ふ水滸専の趣向と評して初中後三段の差別あるよしなれども是古人未發の説維賢と今ふ在るとも必予が言ふ從ふ考ふ金聖歎が評論ふ石碣妖と發くふ始と石碣妖と鎮るふ終る便是七十回と全部とをくらべ所以といふ予ものとらべ何とぞれ彼石碣の天降と義士宿因と示せる中段第二の趣向ふ時魔縁ふ引く嘯く宋江等一百八人酒宋の忠臣とるとをくらべ遼を討且方臘を征るの話説あり是その末の一段と倘七十回と全部とをくらべ末一段を捨てり作者の本意豈然らんや古人いくく讀書百遍初てその意ふ通ずべし嗚呼書を終る支の難ふ書を看ることも易く前ふも論ずと水滸ふ善悪差別る趣向ふ彼とヨメかふ邪魔出現の間のそぶ中ふ武松と張都監と主從ふ怨の

ありとても県ふその一家と屠殺る罪悪最酷しかの故ふ予が這策子ふ武松と武世ふ換る及び寒風の後室と是を主從と考ふ用心ふ口のうとのうを知音の人ハ好るもあらん屬日ある人予ふ薦めて水滸の評と著せとの予も亦あの意ふ応ふわれねど世ふ小説と閲るめけまそよ説味るハ稀甲斐ふ所為と思ふ代くの批評を附ずされ九牛の一毛る寸楮ふ書べくもあらぬ是とも猶婦幼ふ獻れもせん飽れもせん欲抑唐山の俗語と讀得て白るんと欲るあふ字義ふ穿鑿ふ消て趣向の巧拙を評るふ通俗本で同を合まるハ原書の甘味と知ふ申ふ過不及の中ふ執る換骨奪胎類ふ人ハ島滸る戯墨も一流戯謔ふ虐せる本性違ふ述ると低

文政十三年庚寅春正月吉日新版 曲亭馬琴識

花の間田の大鳥
坂根一犬
数の名を法蚊より
盤師ふたはまそく痛我
鈴を有意

漏さぢゆ
菖く
対萱
関乃
より
なか
越える
つらたち
孤垣
鍼目衣
枸橘
上總新司
久景
第八編ノ端像ハ
諸大東川千垣を
枸橘と録しを
冒く改正まべ

物ちがへよむとも
なを亀の子
大江戸
春
月夜笛
涼風
濱の真砂
月二子

蓬莱城背ホ
蓑亀
屋ホ亀の
ちゝ
上
越
波もなぎ
尾を曳
雄山

福
地蔵堂
笑寿
水揚乃四斗樽
朝笑寿冨崎
ちろもち月の新
頼昇
假力寿
力路

歩もち乃ぼる
八重機
彩雲
山媛の
織出
還道村
辨才天
秋色
色水染む
鹿六
夫路之
力路

夏
仙者

赤

夏
梨

年代記児童講譚

初編全二編近刊

当年上梓

山東庵京山作

此稗史ハ神代のむかしより年代記ふまへられたる事を補ひ拾ひ集めこれをよめばわかりやすく世々の事をよくあきらめて童子ののれまなびたよりともなるべき歌ざうし

年中行事御祝儀日童講譚

初編全六編近刊

全部十二冊

山東庵京山作

此稗史ハ正月の松ゐぐりを始とし一ざつに餅を祝ふの七くさの粥の事げつりうけのうるどもべく十二ヶ月の祝儀日の故実来歴をこまかく考へこれを絵まあらしと年中の祝ひ日のいとなみを考る早学問の為ざうし一ちなり

拳獨稽古

中本

全一冊

山櫻連々
逸軒揺舟
合作

古の書ハ拳をよのむ初心の官人ハ「こび被見ぬ」と書ハ方ホ自然とひとりおぼえ四段ところ「つぎ」と書れば朝夕傍ゐあるて弄ぶ義ホいくべき名本なり

戲場顯微鏡 上帙二冊 下帙二冊 彩色入

黙老漁隱著
歌川國貞畫

これまで戲場考古博覽の諸子著述する彩劇の畫ありとのべども皆故實濫觴のみを考ひて看官の觀るべき規則をあらざるに此書いとれまでの戲作とまをうらの考らとまも芝居のつけまくこころ作のいとくこのふとこうくこれてまく芝居のあのそ功者とるまをあつめ且三都考古の戲場ぶくありろ死也

本朝繡像艶容女仙外史 初編五冊

黙々漁隱飜案

この書ハ唐山の逸田弢ゞ筆とあるて著せ妙案まて奇説怪説まとふあり此書るれた本朝ゑ飜案の作ゆ小字短才愚陋を取て日本のまゆ作りて唐賽児を弁の内侍ゑ三利尊氏を義王ゑ擬して一篇の演戲つ〻ひそゑ曲亭翁の顰ゑ效ふめるり看官の誌君子よろしく高評をのぞくおひく次編たんまをうおらんとをこひねがふのみ

顯微鏡後編 萬邦劇場談 上下二冊

黙老漁隱著

これハ初編よりのまてる孫況故るすぐく戲場にくりくるる狂言のあるむをまきびのくさぐ悟へ考へ著ゑ

瀧澤篁民著

迎福南鍼録

一名 相宅手引草

全部五冊 近刻

右同著

雅俗百傳一奇

大本全五冊繪入

平假名附 近刻

右二書共遠ら〻所板仕い浅草通油町書林 仙鶴堂小林喜右衛門印行

近来選擇相宅の書年ゑ月ゑ行れて五車ゆ盈十牛ゑ溢るるとの法術初ゑ為ゑ懼と考ゑ解ゞ難ゞこれるるとの法術ゑ拒ゞ此の書ハ此ゑ辨ゞ書ゑ本つゑ方位宅相神ゑ走避の要領ゑ著して吉に就ゑ凶ゑ避禍ゑ禳ゑ福ゑ迎ゑ宗とゑ示ゑ故ゑ愚ゑ学ゑ疎くて故ゑ多不辨のゑとゑも解難ゞ行易ゑ大凡一家の主人ゑの常ゑ坐右ゑ措とゑ吉凶悔吝の惑ゑ防ゑ日用有益の良籍ゑ

この書ハ雅とゑく俗とゑくこの子狀ゑ奇ゑ人の傳ゑ輯録ゑくて崔徳の一端ゑ表ゑ義烈尚ゑ烈節操の世ゑ捷ゑるゑ要ゑ名聞技芸好事のゑ者ゑ得ゑ不隨ゑ此ゑ一冊ゑ善ゑ見ゑて人の進ゑ欲ゑ本ゑ意ゑ教ゑ人ゑ衆ゑ言ゑこの所ゑ巻中毎ゑ出像ゑ一ゑ人ゑ繪ゑくゑ巻ゑ冒ゑ異聞瑰奇の珍書ゑ